

# ガボン、ムカラバ国立公園における絵画コンクールを通じた環境教育の試み

Environmental Education through the Art Contest for Schoolchildren  
Living around Moukalaba-Doudou National Park, Gabon.

竹ノ下祐二 安藤智恵子 岩田有史 松浦直毅

Yuji TAKENOSHITA Chieko ANDOU Yuji IWATA Naoki MATSUURA

## 概要：

中部アフリカのコンゴ盆地周辺地域の複雑な生態系と高い生物多様性の保全は、人類が今後も豊かな生態系サービスを楽しみ、持続可能な社会を築くうえで不可欠である。効果的な保全活動には地域住民の理解と協力が欠かせない。そのため、地域住民に対して森林資源の非持続的消費に変わる生計手段（エコツーリズム等）を提供するとともに、地域住民主体の保護活動を推進するための啓発・教育活動が重要である。われわれはガボン、ムカラバドウドウ国立公園およびその周辺地域において、大型類人猿を中心とした野生生物の生態と保護に関する研究に従事する傍ら、地域住民の生活向上のための支援活動や、住民を対象とした啓発活動、環境教育活動にとりくんできた。具体的には、医薬品や学用品の寄贈、ゾウやゴリラによる畑荒らしの対策、自前の映像を用いた野生生物の野外上映会などである。こうした活動の一環として、今年2月に地元ドゥサラ村の小学校と連携して、子どもたちによる野生動物の絵画コンクールを実施した。コンクールには58人の子どもたちが参加した。参加した子どもたちの絵から優秀作品を選び表彰するとともに、村内の公共スペースに一定期間展示した。さらに、県庁所在地のチバンガにある国立公園管理共同オフィスでも展示を行い、作品を都市における啓発活動にも活用した。地元の学校と連携した活動は我々にとって初めての経験であった。成果も多かったが、今後連携を深めてゆくためにはいくつもの課題があることも示唆された。

キーワード：環境教育、野生生物保全、ムカラバドウドウ国立公園、大型類人猿

## 1 はじめに

大型類人猿（チンパンジー・ボノボ・ゴリラ・オランウータン）は現生の生物のうち系統的にもっともヒトに近縁な動物である。彼らは二つの意味でわれわれ人類にとって重要な存在である。第一に、その系統的類縁性のゆえに、彼らはわれわれヒトとさまざまな形態的、心理的、社会的特徴を共有している。彼らの研究を通じて、われわれヒトの本性やその起源と進化を明かにすることができる。

第二に、大型類人猿はアジア・アフリカの森林の生態系におけるキーストーン種<sup>[1]</sup>である。大型類人猿は旧世界の熱帯に広く分布しており、種子散布などを通じて生息地の生態系維持に貢献している。たとえばガボンのロペ国立公園では、アオギリ科の *Cola lizae* という樹木の種子散布者はゴリラのみである<sup>[2]</sup>。アジア・アフリカおよび南米の熱帯森林はいずれも生物多様性が高く、われわれ人類に多様な生物資源と生態系サービスを提供する。また、熱帯森林は地球温暖化の主要な要因とされるCO<sub>2</sub>などの温室効果ガスを吸収し、炭素のストックとして機能するなど、地球規模の環境変動を調節する役割を果たしている<sup>[3]</sup>。その熱帯林の維持に大型類人猿は不可

欠な存在なのだ。

しかし、現在、大型類人猿6種のすべてが絶滅の危機に瀕している<sup>[4]</sup>。その主な原因は人間活動である。違法な商業的狩猟、農地拡大、森林伐採、地下資源採掘などによる生息地の破壊や分断化などが大型類人猿の生存を脅かしている<sup>[5]</sup>。近年では、これらに加え感染症があらたな脅威として注目されてきているが、感染症の流行にも人間活動の影響がみられる<sup>[6]</sup>。大型類人猿の保護は人類の課題である。

野生動物保護の手段のひとつに、保護区や国立公園などを設置し、その中への人の立ち入りや活動を禁止、制限するというものがある。しかし、大型類人猿の場合、そうしたやり方での保護には限界がある。遊動域、分布域の広い大型類人猿の個体群を維持するには限られた1区域のみを保全しても効果が薄い。かといって広大な面積を保護区化してしまうと、そこに暮らす地域住民の生業活動に支障が生じる。

そこで大型類人猿の保全活動にあたっては、地域住民の生活や意思を尊重し、地域住民の理解と協力のもと、人と大型類人猿とが共存できるしくみを構築することが重要になる。そのため、地域住民の生活支援や、従来の自然資源の侵襲的利用を制限する代わりとなる経済

手段(エコツーリズム等)の提供が不可欠である。しかし、地域住民に対する利益供与だけでは効果は限定的である。長期的な視野で大型類人猿を保護するには、地域住民自らが大型類人猿の価値を認め、主体的に保護活動に関与することが不可欠である。そのため、地域住民に対する啓発活動が重要となる。

本稿では、まず著者らが大型類人猿の長期調査を行っているガボン、ムカラバドゥドゥ国立公園および周辺地域において行ってきた保全活動、地域支援活動の概要を紹介する。そして、2012年2月に啓発活動の一環として村の子どもたちを対象に行った絵画コンクールについて報告し、その成果および課題を考察する。

## 2 ムカラバドゥドゥ国立公園とその周辺地域におけるこれまでの研究・保護活動

ガボンは中部アフリカの赤道直下に位置し、西側は大西洋に面している。国土面積は約268,000平方キロメートル、人口はおおよそ120万人である。国土の大部分が熱帯森林に被われており、生物多様性豊かな国である。

2002年、南アフリカ、ヨハネスブルグで開催された地球サミットにおいて、オマール・ボンゴ大統領(当時)が国内の生物多様性保全に力を入れる計画を表明した。それを受け、現在までに13の国立公園が設置され、その総面積は国土面積の実に11%を占める。ムカラバドゥドゥ国立公園はそのうちのひとつで、南西部のニャンガ州に位置する。総面積は約5000平方キロメートルの広大な国立公園である。

著者らを含む研究グループは、ムカラバが国立公園の指定を受ける前の1999年から、北部のドゥサラ村周辺で野生大型類人猿の長期野外研究を行ってきた<sup>[7]</sup>。現在までに、ジャンティ・グループと名づけたゴリラの集団を人づけし、個体識別と直接観察に基づいたゴリラの生態調査が進行中である<sup>[8]</sup>。

基礎科学としての類人猿研究に加えて、大型類人猿とその生息地の保全のための研究も行っている。2006年度から2008年度まで、環境省地球環境研究総合推進費の委託研究「大型類人猿の絶滅回避のための自然・社会環境に関する研究」(F-061、研究代表者:西田利貞)の一環として大型類人猿の密度と分布の調査、エコツーリズムとコミュニティ・コンサベーションの実現にむけた基礎調査、地域住民の生活に関する社会経済学的調査、疾病予防のための基礎調査等を行った。2009年度からは科学技術振興機構(JST)と国際協力機構(JICA)の共同事業である地球規模課題対応国際科学技術協力(SATREPS)のプロジェクト「野生生物と人間の共生を通じた熱帯林の生物多様性保全」(研究代表者:山極寿一)がスタートし、ガボン国立科学技術研究センター・熱帯生態学研究所と共同で、国立公園の生態系と生物多様性に関する科学的知見に基づき、地域住民と野生生物

の共生を実現するための研究を実施しているところである。

## 3 地域支援活動・啓発活動

著者らは、上記のような大きなプロジェクトのかたわら、草の根レベルでもさまざまな地域支援活動・啓発活動を実施してきた。それらを以下に紹介したい。なお、実施にあたっては、大型類人猿保全計画日本委員会(GRASP-Japan)に寄せられた寄付金を一部使用したことを付け加えておく。

### 3.1 医薬品・学用品の寄付

国立公園に隣接したドゥサラ村には小さな診療所があり、国から派遣された看護師が常駐している。しかし、医薬品や注射器や包帯などが常に不足している。そのため、村人が病気や怪我をしても十分な処置ができなかったり、薬をもとめて約80km離れた町まで車を頼んでかけなくてはならない状況である。

村にはミッション系の小学校があるが、設備や備品は足りない。また、ガボンでは学年に応じて家庭で用意すべき学用品が定められているのだが、経済的事情でそれらを用意できない子どもが多数いる。

こうした状況を踏まえ、2008年に医薬品と子どもの学用品を寄付した。学用品の寄付は2011年にも再び行った。

### 3.2 獣害対策

村人の多くは村の周辺で焼畑農耕を行い、主として自家消費用にキャッサバ、バナナなどの主食や、落花生、野菜、タバコなどを栽培している。しかし、畑は居住地から少し離れた森林沿いに作られることが多く、しばしば農作物が野生動物によって荒らされる。とくにアフリカゾウやゴリラなどの大型動物は柵やロープをもとめせずに大規模に畑あらしをする。

こうした獣害は、作物に被害を与えるだけでなく、村人と野生動物との感情的な対立を引き起こし、野生生物保護にとっても悪影響をもたらす。そこで、われわれは村人たちと話し合いをもち、もっとも費用対効果の高い獣害対策として畑に見張り小屋を設置することにし、2011年1月にトタン、ランプ、灯油など見張り小屋の設置と泊まり込みに必要な物資を支援した。

### 3.3 NPO 設立支援・地域活動支援

一方的な寄付だけでなく、キャパシティビルディング、すなわち地域主体の活動を推進するための活動も行っている。地域のNPOの設立を支援したり、村で発生する諸問題を自分たちで解決するための議論の場を設けることを推奨している。

2008年には地域活動と自然保護を活動目的とする地

元のNPO ディノンガ（「われらは二人」＝「ともに生きよう」という意味）が設立された。上記の医薬品・学用品の寄付はこのNPOを通じて行った。また、2011年にはガボン国立公園機構（ANPN）の指導によって設立された国立公園地域委員会のメンバーが地域振興のために換金作物の共同プランテーションを作る計画を立てていたため、それに出資し、種芋や農機具の購入にあてた。

### 3.4 啓発のためのイベント

村人たち、とくに女性や子どもたちは日頃村の居住地や畑の周辺で過ごしているため、日本にいるわれわれが思うほどには野生動物と接する機会が多くない。また、居住地における人間と野生動物の出会いは、上述の畑荒らしなど多くが敵対的なものである。そのため、村人たちは野生動物の本来の生態をよく知らないのが実状である。

そこで、多くの村人にゴリラやチンパンジーの野生の姿を知ってもらい、野生動物に親しみを感じ、それらが自分の暮らす場所のすぐ近くに棲んでいることを誇りに思ってもらうことを意図し、類人猿の映像の上映会を村や調査キャンプで随時開催している。小型のプロジェクターとビデオカメラを用いて調査で撮影したビデオを、民家の白壁や、屋外に張ったシートに映すという素朴な形式であるが、毎回多くの村人が楽しみに来てくれる。母ゴリラが子どもゴリラに授乳しているさまなどを見ると、村人はわれわれが感じるのと同様にゴリラとヒトの類似性を実感するようである。また、調査助手として働いている村人が映像に登場すると皆たいへん喜び、ゴリラなどの野生動物により親しみを感じてくれるようである。

### 3.5 雇用の創出

直接の支援活動とはやや異なるが、われわれ大型類人猿研究グループによる実質的な支援の最大のもものは、雇用の創出である。野外調査プロジェクトのごく初期の段階で地域住民と話し合いをもち、調査助手はドゥサラと隣接する2つの村の住民から雇用することにした。さらに、荷物の運搬、調査のための道切り、調査隊の村での住居の建設、キャンプにおける食事や洗濯といったさまざまな仕事も同じ村の住民に依頼している。その結果、老若男女を問わず、子どもを含む住民の大多数が何らかの形で調査プロジェクトから現金収入を得ている。

## 4 絵画コンクール

### 4.1 概要

こうした草の根レベルの活動の一環として、2011年2月にドゥサラ村の小学校の生徒を対象に、野生動物保護意識の啓発を目的とした動物絵画コンクールを実施し

た。以下、実施にいたる経緯およびコンクールの概要、実践の成果および実践を通じてみてきた課題を記す。

絵画コンクールを企画したきっかけは、調査活動や啓発活動を通じて類人猿に親しみを持った村人の中に、ゴリラの絵を描くものが現れたことである。調査助手の一人が調査に使う地図の裏側にボールペンでゴリラの絵を描いたのははじめである。その後、村の子どもや若者たちにもこちらから働きかけてゴリラやその他の野生動物、風景などを描いてもらった。お絵かきの作法にとらわれない自由な手法で描かれる絵には不思議な魅力があった。それをもとに絵葉書やグリーティングカードを作り、保護活動資金にあてるため日本で販売したりもした。

そこで、GRASP-Japanの募金で画材を購入し、村人に提供して地域住民の絵画展を開催する計画を立てた。当初は対象を子どもに限定せず、コンクールではなく単に住民に本格的に絵を描いてもらい、それをガボン国内での啓発活動や日本での募金活動に利用しようという目論見であった。ところが、まったくの偶然なのだが、ちょうど同じ時期に、ドゥサラ村の小学校の校長から子どもの動物絵画コンクールを開きたいので協力してほしいという依頼があったため、対象を子どもに切り替え、画材だけでなく賞品も提供してコンクール形式で実施することにした。

小学校の生徒のほぼ全員の58人の子どもがエントリーした。絵画指導は校長が中心となり学校で行った。日本人や熱帯生態学研究所の研究者、地域住民の有力者に依頼して優秀作品を選び、受賞作品を描いた子どもを表彰し、賞品を贈呈した。表彰式は小学校で、住民を招いて行った。また、事後に県庁所在地のチバング市に活動紹介をするブースを作り、全員の絵を展示した。

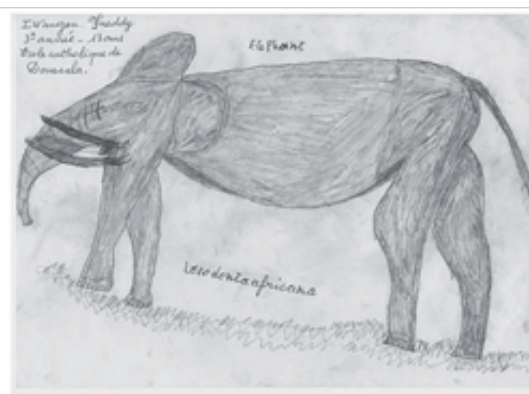


図1 作品例。「竹ノ下賞」受賞作

### 4.2 成果と課題

今回の絵画コンクールを通じて、大型類人猿をはじめとした野生動物保護を進めるうえで、いくつかの成果を認めることができる。第一に、われわれの啓発活動の実践のなかで、はじめて子どもを対象に行ったということの意義は大きい。将来を担う子どもたちへの啓発・教育

活動は大人へのそれよりも重要である。

第二に、われわれ日本人によるお仕着せの行事ではなく、地域の学校と連携し、地域の活動をわれわれがサポートするという形をとれたことにも意味があった。これを機に、地元発の活動をさらに推進していきたい。

第三に、選考や表彰の場に地域住民に参加してもらえたことである。後述のようにいくつかの問題はあったが、今回の実践が学校行事としてではなく地域の行事として行えたことは評価できる。

第四に、絵画を都市で展示することにより、村の子どもたちに対する環境教育の一環として行った活動の成果物を都市部での啓発活動に活用することができた点である。こうした活動を積み重ねることで、地域住民が啓発される側からする側へと転換してゆければよいと考えている。

一方、今後同様の実践をすすめるにあたっていくつもの課題が浮かび上がってきた。第一に、優秀作品の選考と表彰のやり方である。今回の絵画コンクールは選抜や成績評価のために行ったのではなく、子どもたちに参加のインセンティブを与えるためのものであった。そのため、研究者や住民有力者の名前を冠した賞をたくさん用意し、できるだけ多くの子どもが受賞できるよう工夫したはずだった。しかし、子どもたちやその親である住民には、その意図がきちんと伝わらなかったようである。そのため、誰が受賞するかということで子どもや大人どうしの間で諍いが生じ、われわれも住民も、やや後味の悪い思いをすることとなった。賞品を出したことが、こうした諍いを助長した面もあると思われる。さほど高価な賞品ではなかったが、生活必需品も不足がちな村の住民にとっては、限られた子どもだけが賞品をもらうということは思った以上に深刻な問題だったのかもしれない。

第二に、子どもたちの絵の技術・レベルが低かった。下手というのではなく、最後まで描ききる、画用紙の全体を使う、色はすべてに塗る、といった基本ができていない作品が多かった。ガボンの、しかも地方の農村の子どもたちは、日本の子どものように幼稚園や小学校で図画工作を通じた表現活動を行った経験に乏しいし、学校の先生たちも絵画指導の訓練をうけていない。そうした状況では、画材だけ提供するのではなく、適切な絵画指導も必要であったと反省している。同時に、拙速に環境教育を考えるのではなく、子どもたちがのびのびと自己表現をできるような教育支援を行うことが、長い目で見れば自然保護にも有効ではないかと感じた。

関連するが、第三に作品の多くに「やらされた感」が感じられた。あきらかに写真集などの図版を丸写ししたと思われるものもあった。また、題材として選ばれた動物の種類も同じものが多かった。これにはいくつかの理由があると考えられる。まず、子どもたちは「見たもの4を素直に描く」という経験をしていない。とくに、ガボンの学校では日本のように子どもが主体性を発揮でき

る環境を作るよりも、先生に指示されたことを指示されたとおりに行うことが求められるため、子どもの意識が「自由に描く」というより「きちんと描く」ほうに向かってしまったのかもしれない。もうひとつの理由としては、上にも述べたように、子どもたちは実体験として野生動物とふれあった経験が少ない可能性がある。だとするならば、絵を描かせる以前の段階で、子どもたちが実際に野生動物と関わるような自然体験活動を行うことが求められるのかもしれない。

## 5 おわりに

今回の試み全体を眺めると、成果よりも課題のほうが多かった感がある。とはいえ、われわれの草の根レベルの活動が少しずつ現地に根付いてきているとも感じている。今後もわずかずつであれ、歩みを止めずに活動を続けてゆきたい。

## 6 謝辞

本稿に記した大型類人猿保護活動および地域住民への支援活動には、大型類人猿保全計画日本委員会(GRASP-Japan)に寄せられた募金を使用した。募金を寄せてくださった企業、個人の方々、および前代表理事の故・西田利貞氏にお礼申し上げます。京都大学の山極寿一氏、鹿児島大学の藤田志歩氏ほか共同研究者であり保護活動の共同実施者の諸氏には活動に協力いただいた。また、本稿に記した支援活動・研究活動の一部は環境省地球環境研究総合推進費(F-061、研究代表者：西田利貞)およびSATPRES(地球規模課題対応国際協力事業、研究代表者：山極寿一)の資金によって行われた。

## 参考文献

- [1] R.T. Paine. A conversation on reining the concept of keystone species. *Conservation Biology*, 9(4):962-964, 1995.
- [2] C.E.G. Tutin, E.A. Williamson, M.E. Rogers, and M. Fernandez. A case study of a plant-animal relationship: *Cola lizae* and lowland gorillas in the Lope reserve, Gabon. *Journal of Tropical Ecology*, 7(02):181-199, 1991.
- [3] Julia Glenday. Carbon storage and emissions off-set potential in an east african tropical rain forest. *Forest Ecology and Management*, 235(1-3):72-83,2006.
- [4] T. Leary, L. Seri, T. Flannery, D. Wright, S. Hamilton, K. Helgen, R. Singadan, J. Menzies, A. Allison, R. James, K. Aplin, L. Salas, and C. Dickman. LUCH red list of threatened species.

- version 2010.1. [www.iucnredlist.org](http://www.iucnredlist.org), Downloaded on 9 December 2011, 2010.
- [5] M. Q. Sutton and E. N. Anderson. World atlas of great apes and their conservation. *Environmental Conservation*, 33(2):172-178, 2005.
- [6] 竹ノ下祐二. 大型類人猿の保護における感染症問題. 霊長類研究, 21(1):47-64, 2005.
- [7] 竹ノ下祐二. ガボン、ムカラバ=ドウドゥ国立公園の類人猿の調査と保護の現状. 霊長類研究, 20(1):71-72, 2004.
- [8] C. Ando, Y. Iwata, and J. Yamagiwa. Progress of habituation of western lowland gorillas and their reaction to observers in Moukalaba-Doudou National Park, Gabon. *African Study Monographs. Supplementary Issue*, 39:55-69, 2008.5